

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：34503
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009 年度 ～ 2011 年度
 課題番号：21520388
 研究課題名（和文） 文久年間日本、言語・文化交流の総合的研究・・・翻訳語彙の概念史研究を中心として
 研究課題名（英文） A General Study of Linguistic and Cultural Intercourse of 1860's Japan
 研究代表者
 上垣外 憲一（KAMIGAITO KENICHI）
 大手前大学・総合文化学部・教授
 研究者番号：50120332

研究成果の概要（和文）：文久年間に各方面での文化変動が生じた原因として、文久元年のロシア艦対馬占領事件が極めて大きい。文久年間の概念史における大きな変化あくまでも海軍建設を中心とした変動であり、海軍建設に必要な学問、自然科学、軍事科学、国際法、外国語学等々はその刺激によってこの時期急速に発展したのである。

個別の成果としては、ポサドニック号事件に際して勝海舟が深く関与し、これが、彼が幕末の外交問題で重要な役割を果たすきっかけとなったことがほぼ解明されたことをあげたい。

研究成果の概要（英文）：Among the reasons for the cultural transformation in the early 1860's in Japan, the 'Posadonic Incident', which occurred in 1861, was the most important. The big conceptual historical change in the early 1860's is caused mainly by Japan's necessity to build a modern navy, and the study of Western natural science, military science, international law, and Western languages were stimulated by Japan's strong intention to build a powerful navy of its own. They were regarded, so to speak, as the peripheral science of naval science.

As the specific outcome of our study, I only indicate this: Katsu Kaishu worked in secret in the diplomatic negotiation of Posadonic incident, and this gave him a great opportunity to train himself to become the most important diplomatic specialist in the last days of Tokugawa Shogunate.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
平成 22 年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 23 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文学/文学/各国文学・文化論

キーワード：文久年間・文化交流・概念史・翻訳語彙・勝海舟・海軍・国際法

1. 研究開始当初の背景

文化史の上で無視されがちな文久年間が、小維新ともいえる文化変動の時代であった

ことに着目した。国際日本文化研究センターにおいては東アジア近代における概念史研究が共同研究として進められていることか

ら、この分野において文久年間に焦点をあて、さらに精密な研究を推進することが、目標として考えられた。

2. 研究の目的

文久年間の文化変革運動は、例えば英和对訳袖珍辞書の編纂に見られるように、あるいは西周の西洋学術用語の初歩的な試みに見られるように、現象としては翻訳語彙の大量な進展、変化が認められる。こうした翻訳語彙の変容の原因を明らかにすることが、本研究の最大の目的である。

3. 研究の方法

翻訳語彙の概念史的研究から、蘭学、海軍、外交等の文化変動を総合的に把握するために、蘭学、英語学、国際法、海軍、陸軍関係の語彙を個別的に考究し、さらに全体を総合的に観ることによって、その概念史における文久年間の語彙、翻訳法の変動の原因を明らかにしようとした。

4. 研究成果

文久年間日本、言語・文化交流の総合的研究は、当初副題に於いて示されるように翻訳語彙の分析研究を大きなテーマとしていた。本来的な意味での概念史研究のこの時期に関する概説は、稲賀繁美国際日本文化研究センター教授の英語論文、“Philosophia, Ethica and Aesthetica in the Far Eastern Cultural Sphere”が行っている。

本来的な意味での概念史的な語彙研究は、中国に於ける研究協力者、孫建軍・北京大学准教授、聶長順・武漢大学教授によって行われ、国際日本文化研究センターで発表された内容は、それぞれの大学の紀要に発表される予定とのことであるので、ここでは収録しない。

研究会と史料調査を重ねて明らかになってきたことは、1860年代の東アジア文明史という全体像である。すなわち、日本、中国、朝鮮がいったい「文明史」という観点から見ると、どのような位置づけがなされるか、という設問に対する答えである。

そのような全体像を中国側から提起してくれたのが、研究協力者として中国から招請した馮天瑜・武漢大学教授の『日中における「漢字文化圏」概念の形成』である。

研究代表者上垣外憲一は、当初蕃書調所とオランダ留学時代の西周の翻訳作業に研究を行った。ここから同時期蕃書調所頭取であった勝海舟の活動の調査に進んだことから、

この「文久年間の小維新」のきっかけとなったポサドニック号事件に勝海舟が深く関わったことを見いだした。勝海舟とポサドニック号事件の関係を集中的に調査した。この点の調査から、明らかになったのは以下のようなことである。

文久年間の様々な文化変動は、幕府首脳が事件の解決にイギリス東洋艦隊の力を借りなければならなかったことで、日本の海軍力の弱体を痛切に感じ取ったことが最も大きな原因であるということである。

オランダへの大規模な海軍留学生の派遣がその文化変動の顕著な一例であるが、ここで学ぶことが予定されていた、海軍学の基礎、あるいは周辺をなす学問の一つとして国際法が入っていたことに注目すべきである。このことは、海軍学の学習が、周辺科学としての西洋の社会科学の学習、研究へと進んでいくことを示しているのであり、西周の西洋学術用語の翻訳は、全般的な西洋文明の学習、研究の中で特筆すべき文久年間の出来事であった。

海軍建設の立役者であった勝海舟が、一方では「外交」の面においても、表面的にはあまり目立たないが、最も重要な働きをなした人物であった。このことに関する論考の一部分は、上垣外憲一「ポサドニック号事件と勝海舟」で発表した。最終的には中央公論社から同じ著者が2012年後半に刊行予定の『勝海舟と幕末外交』で明らかにする。

文久年間は諸外国との外交が紛糾を極めた時代であり、国際法に対する関心が日本で急速に高まった時代である。その国際法の翻訳語である「万国公法」という語彙について明らかにしたものが、川尻文彦・愛知県立大学准教授の『「万国公法」の受容について——19世紀末～20世紀初頭、日中間の「思想連関」の観点から』である。

塚原東吾・神戸大学国際文化学部教授の『川本幸民の化学的業績に見られる「軍事科学化」：宇田川の化学語彙（1830-40s『舎密開宗』）と上野彦馬のマニュアル（1862文久2、『舎密局必携』）の間にあるものとして』は、当時の蘭学に於いて重要な役割を果たしながら、あまり研究のない川本幸民の1860年代に於ける業績を明らかにしたもので、個別の研究成果として重要なものである。

また劉建輝・国際日本文化研究センター准教授には、1860年代東アジア文化変動の前史をなすものとして、「近代の濫觴……広東十三公行の文化活動」という報告を研究会でいただいたが、その内容はすべて近刊の『日

中二百年・・・支え合う近代』の中に盛り込むことが決まっており、学会発表には収録しなかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 川尻文彦 「張謇の国際秩序観—朝鮮経験と日本経験の間」吉田忠編『19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究』国際高等研究所、査読有、2010、
- ② 川尻文彦 「“進化”与加藤弘之、嚴復、梁啓超—近代日中之間關於“進化”的“概念”關聯」鄭大華・黃興濤・鄒小站主編『戊戌変法与晚清思想文化轉型』社会科学文献出版社、査読有、2010、

[学会発表] (計 5 件)

すべて本科研費最終研究会 (2012年1月22日、23日、国際日本文化研究センター) における発表である、原稿は既に受理、ウェブサイトでの公表を予定

- ① 上垣外憲一 「ボサドニック号事件と勝海舟」
- ② 稲賀繁美 “Philosophia, Ethica and Aesthetica in the Far-Eastern Cultural Sphere: Receptions of the Western Ideas and Reactions to the Western Cultural Hegemony”
- ③ 塚原東吾 「宇田川の語彙 (1830-40s 『舎密開宗』) から、上野彦馬のマニュアル (1862 文久2、『舎密局必携』)、そしてその間をつなぐ川本幸民の化学的業績に見られる「軍事科学化」のエージェント性、
- ④ 川尻文彦 「『万国公法』の受容について—19世紀末～20世紀初頭、日中間の「思想連関」の観点から」
- ⑤ 馮天瑜 「日中における「漢字文化圏」概念の形成」

[図書] (計 2 件)

劉建輝 『日中二百年』 武田ランダムハウスジャパン、2012年9月出版予定

上垣外憲一 『勝海舟と幕末外交』 中央公論社 2012年11月出版予定

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上垣外 憲一 (KAMIGAITO KENICHI)
大手前大学・総合文化学部・教授
研究者番号：50120332

(2) 研究分担者

稲賀 繁美 (INAGA SHIGEMI)
国際日本文化研究センター・研究部・教授
研究者番号：40203195

塚原 東吾 (TUKAHARA TOGO)
神戸大学・国際文化学部・教授
研究者番号：80266353

劉建輝 (LIU JIANHUI)
国際日本文化研究センター・研究部・准教授
研究者番号：00321620

川尻 文彦 (KAWAJIRI FUMIHIKO)
愛知県立大学・外国語学部・准教授
研究者番号：20299001

(3) 研究協力者

馮 天瑜 (FENG TIANYU)
武漢大学・伝統文化研究所・教授

孫建軍 (SUN JIANJUN)
北京大学・日本語学部・准教授